

優秀賞

## 私とふるさとを絆ぐ黒枝豆

福井県 福井市春山小学校六年 堀澤 小春

私には顔も見たことのない文通相手がいる。「土本さん」という黒枝豆を作っている京都の農家さんだ。土本さんとの文通は、私が五歳の時に書いた一通の手紙から始まった。

昔住んでいた家の近くには野菜の直売所があって、秋になるとたくさん黒枝豆が店頭に並んだ。その中でも土本さんの作った黒枝豆がとてもおいしかったので手紙を書いたのだ。

「どもとさんへ  
どもとさんのくろえだまめは、おおきくてきれいでとてもおいしいです。」

すると、しばらくして土本さんから手紙が届いた。「こはるちゃんへ

お手紙ありがとうございます。つくったくろえだまめがおいしいってもらうのがいちばんうれしいです。ありがとうございます。」

手紙には黒枝豆畑の写真が添えられていた。返事

が来たことが嬉しくて、土本さんでどんな人かなあと想像しながら手紙を何度も読み返した。

小学二年生の春、福井県に引っ越すことになったので、また土本さんに手紙を書いた。

「土本さんのくろえだまめがたべられなくなるのがざんねんです。」

引っ越した後、お取り寄せしたりスーパーで買ったりした黒枝豆を食べたけど、「やっぱり土本さんのが一番おいしいなあ、また食べたいなあ、土本さんは元気かなあ」と思っていた。

四年生の秋、土本さんから黒枝豆が届いた。箱いっぱい黒枝豆はきれいな緑色で、宝石みたいにキラキラ輝いていた。早速、昔みたいにお母さんと一緒に下ごしらえをして、ふっくらとゆであがった黒枝豆を家族で食べた。食べながら、通った幼稚園や小学校、遊んだ公園、散歩道、海や山、友達や先生の話をしてとても楽しかった。土本さんにはお礼の

手紙と福井の特産品を送った。

その次の年も黒枝豆が届いた。そして、一緒に入っていた手紙にはこう書いてあった。

「お返しはどうぞお考えにならずに、ただ食べていただくだけでいいと思います。小春さんの最初のお手紙が本当に心の支えなのです。」

私は胸がドキンと鳴った。五歳の時に書いた私の手紙が、今も心の支えになっているなんて！

土本さんの黒枝豆を食べると、ふるさと京都の思い出話に花が咲いて笑顔になる。幸せな気持ちがいっぱい詰まっているから特別にうれしいのだと気がついた。私の手紙が土本さんの心の支えとなり、土本さんの黒枝豆が私とふるさとを絆いでくれる。一通の手紙から始まった不思議な関係に心が満たされる。顔も見ることのない農家さんとのやり取りを、今年も私は楽しみにしている。

